「学校図書館の情報リテラシー教育と大学での情報リテラシー教育：二つの情報リテラシー教育を実践して

第21回図書館利用教育実践セミナー
in 名古屋館種を超えた情報リテラシー教育の枠組みづくりに向けて
生涯にわたって学びを支える図書館ー実践と理論の融合を目指して

同志社大学社会学部嘱託講師　家城清美

2017.3.12 於）椙山女学園大学中央図書館

はじめに　発表内容

- 自己紹介
- 情報リテラシー教育で感じたこと：中・高と大学で時代とともに変わる情報活用行動
- 情報活用に関しての問題点：学生の行動から
- 情報リテラシー教育へのいくつかの提案

  利用指導理論に沿った、利用者中心の利用指導のありかたとその方法

自己紹介
情報リテラシー教育にどのように関わってきたか

- 1977年（S52）年度から
  学校図書館に勤務
    オリエンテーション実施
- 2001年度から2011年度
  司書教諭に任命される
    全学年の「総合的な学習の時間」でティームティーチング実施
    他の授業でのガイダンス ← ガイダンスの手法・内容が変わる
- 2000年度から大学非常勤及び嘱託講師を兼務
- 2012年度から大学非常勤講師及び嘱託講師のみ

今日の生徒・学生の情報探索行動の違い
2000年ころ

- 2000年はじめ

  Webサイトの参考文献表記　⇐　教師にも感謝される

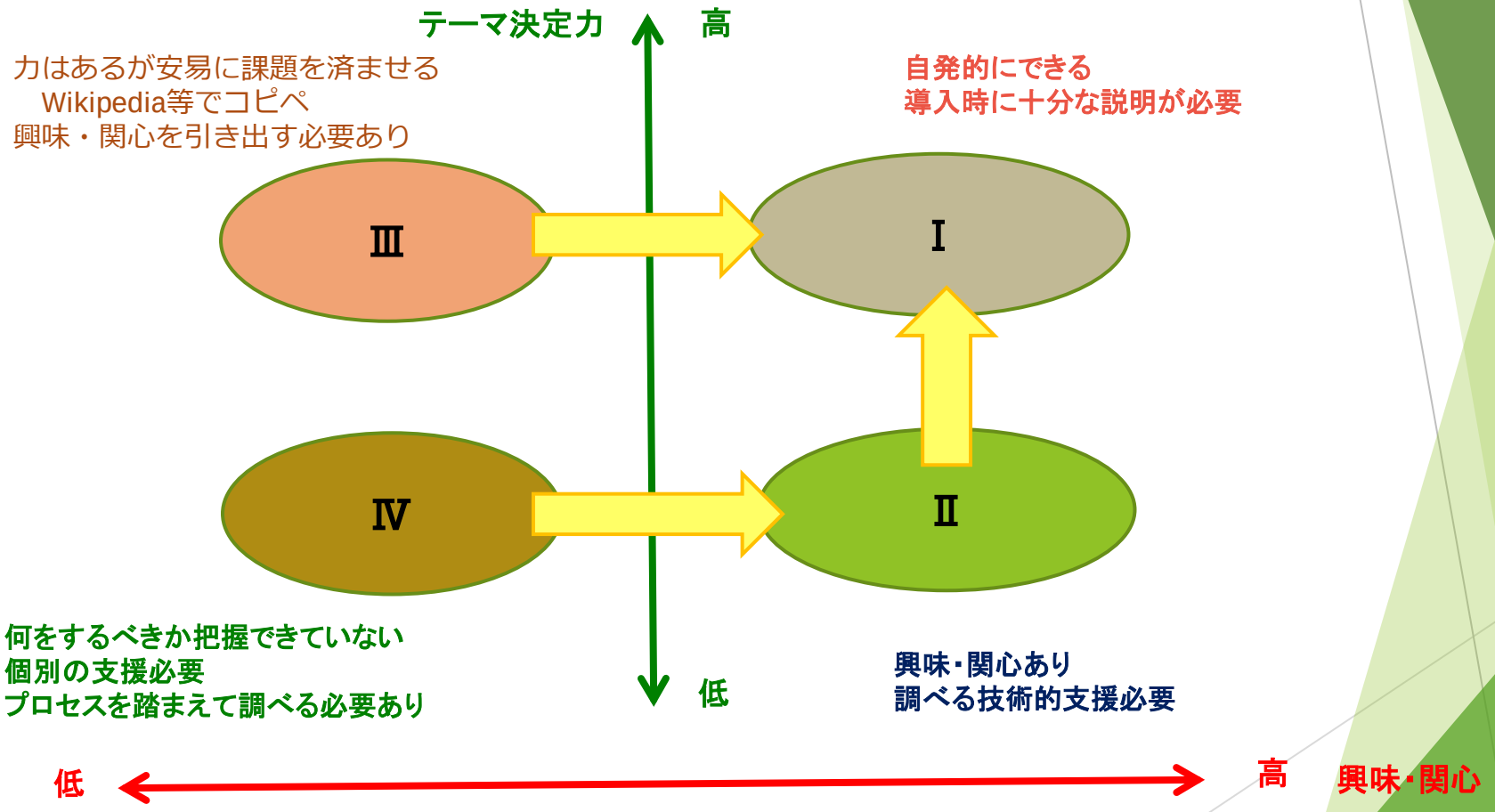
- 参考文献の書き方、引用表記の仕方などが珍しい
- 資料は選び取ることができる：検索式、検索オプションの活用　　⇐　メディアの特徴をつかむ
- データベースの紹介：新聞、雑誌記事、論文、資料

- 一つの資料での発表はダメ　⇒　図書・webサイトをプリントアウトしたもの・複写物など

  ということの定着　　いくつかの種類のメディアで調べている

司書教諭の指導-協働の中で：生徒の類型化調べる学習のスキルと興味・関心の類型

あらかじめ、OPAC検索、新聞記事検索、印刷方法については授業で説明済み



『課題解決型学習の第一歩　T-modelを活用した授業事例』 P44より編集

今日の生徒・学生の情報探索行動の違い　2010ころから現在

- Webサイトの充実
- ブログなどの情報の質の混合　　事典風に見える個人サイト　専門家のブログ
- クリック回数のよる情報の表示の順位付け

　まだ、図書などを参考にしている：中・高の場合は担当教員が課題の中でメディアを指定できる

　総合的な学習の時間のような長期的に図書館を利用する授業の場合生徒の途中の行動を把握

しかし、大学の場合

　スマートフォンの普及と機能の充実

- 検索行動が変わる
- まず、スマホで検索
- HPの資料だけでまとめたり、発表しようとする　机上に図書がない

　一つの資料はダメだけれど、スマホの中のいろいろな情報を見ていることで自己肯定

　事例）京野菜を調べるのに図書を調べた学生の感想

求めれば、資料を得ることができることを実感してほしい

- 大学での講義

  歴史的基礎知識の習得

  理論の習得

  ⇓

  テーマを選択し、課題にグループで取り組む

講義期間に図書館の利用

図書館スタッフによるガイダンスの実施

オリエンテーションでなく、課題に沿ったガイダンスを依頼

それでも

- 課題についての発表は、楽しくそれなりにまとめ発表する

  内容は、第三者的なコメンテーターのような発表＝金太郎飴的発表

- 多様なメディアが選択できない

  関係するHPの中の古文書などを活用した発表　⇐　思考の広がりが期待できない

  十分な情報による内容か

  内包する情報・知識を更新できるか

- 情報をまとめる、整理する技術が習得できない　⇒　参考文献、引用表記
- 検索で容易に情報が出てくる　⇒　情報活用はできていると思っている

一つの課題に取り組むことは、周辺知識を得ることでもある。次の課題に取り組むときに

以前の経験が役に立つか：内容知、事案に関連する事象（関連語）などの習得

自立した学習者、生涯学習する者になれるか

館種を超えた情報リテラシー教育−中等教育の場合−指導方法の違い

- 中等教育での情報リテラシー教育　児童・生徒は発達途中

  レファレンスの場合

  生徒の求める情報をすぐには提供しない

  テーマ（課題）の明確化を支援

  ⇓

  探索・検索の手順

  ⇓

  必要とする情報がある資料を見つけた

  ⇓

  自分で解を見つける

  必要とあれば、用語辞典や国語・漢和辞典など辞・事典など参考資料の紹介

個人指導でなく授業でのガイダンスも課題解決のプロセスを取り上げる

館種を超えた情報リテラシー教育ー高等教育の場合

- 学生は自立した大人としての扱い

  しかし、中等教育でどこまで情報リテラシー教育を経験しているか＝調べ学習・探究学習を経験しているかによって、技能・能力は異なる

  情報社会でIT技術の急速な進歩のなかでは、

- 情報活用のプロセスを経験すること・学ぶことには中等教育・高等教育の差ないのでは？

情報リテラシー教育をする前に

- 情報探索のプロセスを示す　⇐　自ら課題を解いてみる
- キーワードや相関関係を想定する方法を紹介　⇒　キーワードなどの想定
- 課題に関連する情報の探索・検索方法を紹介する　関連データベースの活用の紹介

ジャパンナレッジだけでなく

⇦　アカデミックな情報の見つけ方を知る

様々な分野の専門的データベースなど　⇐「いろいろな情報があるなぁ」から動機付けへ

「では、次に欲しい情報はどうすれば得られるかなぁ」

事例）冷戦と日本の航空史を調べた学生の感想

歴史的事件の把握でなく、人々の日常生活に影響を及ぼしたかを知る

当時の新聞記事がたくさんあることを意外と思うが、当時は関心を集めていたことだと知る。

利用指導理論に沿って

- ソース・アプローチ理論　**1960～70年代**

  図書館中心：利用方法、マナー、図書館の使い方、参考資料の使い方

  児童生徒の学習意欲をどう引き出すかは課題=生徒のニーズ

- パスファインダー理論　**1980年代～**

  児童生徒が学習するテーマに合わせた利用者教育：児童・生徒のニーズに応える

  学校のカリキュラムに関連し実施する重要性

  資料探索の一般的な方法を生徒が概念的に理解する資料

- プロセスアプローチ理論　**1990年代～**

  パスファインダーアプローチの限界：特定の情報源の使い方の指導のみ

  学習者の探索するのに必要な推論のプロセスを発達させることは不可

  学習者の視点による情報探索過程、利用者の関心・欲求に沿う

⇓

シラバスの把握・シラバスにテーマがあれば、試行してみる

図書館員がハブになり、教師と学生と資料をつなぐ　⇐　学校における司書教諭の役割と同じ

アメリカの学校図書館基準

1998『インフォメーション・パワー：学習のためのパートナーシップの構築』情報を見つけることから

生徒に必要な、情報利用と結びついた学習技術、知識の創造、知識を更新するスキルを

図書館員と教員の協働で育成（メディアプログラム導入）

生涯学習者として情報評価の操作法を知る必要性の理解：情報リテラシー、自主学習、

社会的責任の大別した「生徒の情報リテラシー基準」の提示

2007『21世紀の学習者のための基準』

2009『21世紀を生きる学習者のための活動基準』

グローバル化の進んだ高度情報通信ネットワーク社会で充実した

人生をおくるために生徒が身につけておくべき標準的な知識・スキルの枠組みのまとめ：学びの基準

学びの目的を９の信条に示す：読むこと、探究、倫理的に情報を利用すること、

テクノロジーを使いこなすスキル、公平なアクセス、情報リテラシーの複雑化、

情報の拡張による思考力、自立学び、社会的文脈のなかで学ぶ学びのスキルを高める

⇒　学校図書館が不可欠

真の情報リテラシーとは

まずは

情報を選び取る技術を身につける ⇐ 関連情報を多角的に多く知るための資料紹介

- 現在　正確な情報を探索、検索できる。その情報を活用し理論的に意見を発表できる。
  効果的な発表方法を活用できる。著作権を守る。

⇓

最終的には

- 正確な情報であってもある文脈では、正当な情報とは限らない
- 誰が、何のために、発信しているのかを理解する（印刷・非印刷資料とも）⇐ 出版社・著者・
  編集者・機関の特徴も紹介

⇓

- 自分の考え・意見の中でどのような意味を持つか判断できることが大事 ⇐ 人格形成の必要

哲学・倫理学・思想書の資料の紹介

cf『21世紀を生きる学習者のための活動基準』による

次に起こり得る課題の参考になる内容知と方法知の蓄積